

八月になり“夏真っ盛り”の時がやって来た。一か月ぐらい前「だんだん暑くなって来る」といいながらも時には肌寒く厚い長袖の服を羽織った事もあった。梅雨が終わり陽の光が目にも痛く感じるようになってしばらく経った。身体がだるい、暑さに気持ちが萎え、ごろりと横になり、何もしない、何もしたくない、眠い、早く身体がこの暑さに慣れますようにと願うしかない。今、台風が二つ近付いて雨模様が続き扇風機の風も涼やかで過ごしやすい。冬、突然寒くなり、服を重ねても寒さが止まらず頭痛がやって来る「こんな事では冬が越せないぞ」と思う、突然暑さがやって来たこの頃はごろりと横になり「こんな事では夏が越せないぞ」と同じように思うが、1週間、10日間もすれば身体が馴染んでくる、そうこうする内に厳冬も盛夏も終わってしまう、よくできたものだと感心。

机に“小袖”の雑誌が乗っていた、ぱらぱらめくって驚いた、日本の千年前の着物の写真、小袖という着物のデザインに色彩に目を見張った。「日本の中世は暗黒時代」と書かれたのを見て「暗黒とは何だろう」と興味を持って幾つかの本を読んだ、暗黒とはいえアートや芸能が花開き自由闊達な息吹が感じられるなどと思いつつ、当時の“大衆・身分・差別”の部分により興味を持ち何冊か読んだが、その話は今回はなし。そんな折“小袖”の写真集を見つけ「なんと大胆で豪華なデザインだ」とそれらの着物の染色や織物に心打たれた。ほとんどが時の権力者の妻子が着ていた物だろうが、凄い。最近CGで絵を頼まれた。といっても自身の絵やその一部を組み合わせて作る作品。自分の絵やFigureの檻樓君をphotoshopでレタッチすると全く違ったものが出来上がるのが新鮮で面白い。パソコンで絵を描くのはできない、オレには向いていないと思い込んでいたが、手描きの物をパソコンに取り込んで、その上から描いていくのならなんとかなる、なんとか絵ができる。それこそ思いもよらぬ不思議な世界が表れる、幻想瞑想の世界だ。

久しぶりに良寛さんの本を読んだ。旅行家で随筆家の近藤万丈が若い頃たった一度会った僧の思い出話<寝覚め友>この内容の真偽は、本ものの良寛なのか違うのかはわからないそうだが、いかにも良寛らしいと著者の先生の弁。おのれ万丈、よわひいと若かりし昔、土佐の国へ行きしとき、城下より三里ばかりこなたにて、雨いとう降り日さえくれぬ。道より二丁ばかり右の山の麓に、いぶせき庵の見えけるを行きて宿乞ひけるに色青く面やせたる僧のひとり炉をかこみ居しが、食ふべきものもなく、風ふせぐふすまもあらばこそといふ。雨だにしのぎ待らば何をか求めむとて、強ひてやどかりて、小夜更くるまで相対して炉をかこみ居るに、此僧初めもの言ひしより後は、ひとことも言はず、座禅するもにあらず、眠るにもあらず、口のうちに念仏唱うるにもあらず、何やら物語ても、只微笑するばかりにて有りしにぞ、おのれ思うにこは狂人ならめと。其夜は炉のふちに寝て、暁にさめて見れば、僧も炉のふちに手枕してうまく寝て居ぬ。扱（さて）明け果てぬれど、雨は宵よりもつよくふりて立ち出づべきやうもなければ、晴れづともせめて小雨ならんまで宿かし給はんやというに、いつまでなりともと答へしは、きのふ宿かせしにもまさりて嬉しかりし。ひの巳（み）の刻すぐる頃に麦の粉湯にかきまぜてくらわせたり。扱この庵の中を見るに、ただ木仏のひとつたてると窓のもとに小さきおしまづき据ゑ其の上に文二巻置きたる外は、何ひとつたくはえもてりとも見えず、このふみ何の書にやとひらき見れば唐刻の莊子なり。そが中に此の僧の作と覚しくて、古詩を草書にて書けるがはさまりてありしが、から歌ならばねば其の巧拙は知らざれども、その草書や目を驚かすばかりなりき。よりて笈（おひ箱）のうちなる扇二つとふでて賛を乞ひしに、言下に筆を染めぬ。ひとつは梅に鶯の絵、ひとつは富士の根を絵かきしになりしが、今は其賛は忘れたれども、富士の絵の賛の末にかく言うものは誰ぞ越州の産了寛書すとありしを覚え居ぬ。<略>

越後の良寛の噂を読み、若い時に会ったあのお方はもしや・・・と近藤万丈の文です。良寛40歳、万丈20歳ぐらい。良寛は名も無き乞食僧なので、当時の足取りはわからないらしい。四国八十八か所の札所の巡礼を兼ね、遍参修行の旅を続けたであろうと、これまた、著者の先生の弁。

良寛さんの字がいい、好きだなあ。草書は上手すぎて馴染めないが、へたくそ部類の字がいい、ぞっとするぐらい、いい。オレも「ぞっとするぐらいに、いい」なんて言われてみたい、そんな作品を造ってみたい。

図版は、できたてCG。

暑い、盛夏だというものの今日は特に涼しい、涼しい日が続いているというのは、雨模様、曇り模様の日が続いているからだ。天気図を見ると台風が二つ在る、朝鮮半島に近づく12号が後発で、先に発生した11号がまだ日本の南に在り、明後日ぐらいに四国地方に近づけらしいが、この二つの台風が前に後ろにお互いを牽制しているのか、協力しているのか、いつものようにさっさと動かず、九州、四国にただら雨を降らせているらしい。衛星画像で見ると台風の雨雲だけではなく日本海に厚い雲が在り、その雲までが刺激を受け、同じように活発に動き、台風は遠い処に在るにもかかわらず日本海側も雨模様だとか。「記録的な大雨が降った」「一か月分の雨がこの何時間かに集中的にこの地方に降った」とニュースで形容がされるように大雨で、土砂崩れ、道路寸断、道路や家が水に浸かる、川が増水し濁流が今にも押し寄せようとしている、というようなすさまじい画像がニュースで流される。わが地元大阪はもう何十年も台風の被害はない、「巨大な台風が発生」「今回は大阪直撃」「警報が出たらこのように対処してください」といくつかの話は聞くだけで、多少強い風、多少大雨が降り安威川の河川敷が水に浸かり、オレの恒例の安威川詣でが二日ほど出かけられない、というような被害だけ、台風がすぐ傍に居るらしいと言いながら、陽が照っていたり、台風一過の青空が眩しかったりと、ここ何十年はそういう状態だ。台風被害で困っている方々、生活が寸断され、生命が脅かされている方々には申し訳ないが、大阪にはあまり台風被害は昨今無いようだ。

台風の思い出話となると淀川の話になる。オレが小学生、中学生というともう半世紀以上も前の話。住まいも小学校も中学校も淀川の土手まで100メートル、200メートルというところに在った。当時は鳥飼村と呼ばれ、村立鳥飼小学校に通っていた。小学生時代の鳥飼村の話になると思い出話がたくさんある。「あれはものすごくでかいものだった」「ものすごく遠かった」「とにかくものすごかった」「世界で一番だった」と思い出す話はたくさんある、子どもながらも「ものすごい」が連発だ、いいながらも検証の仕様が無い、ものすごいは話半分、子供の視線、身体の大きさが半分も無かった頃の目線、あっちこっちに考えが及ばない頃の思考をそのまま「こうだった、こうである、ものすごかった」とこのように思い込んでいますが、思い出話の本質とはこんなものだろう、子どもの話とはこんなものだろうと、笑いながら聞いてください。小学校と住まいを結ぶ幹線道路は淀川の土手の上、それしかなかった。鳥飼小学校が在った今の仁和寺大橋（100円橋）と、住いの在った鳥飼大橋付近まで土手の上をボンネットバスが走り、荷車が、三輪トラックが、バタコ（今の単車、バイクの事）が時々通っていた。当時はまだモータリゼーション時代の夜明け10年前。田圃の労働力は牛、今でいう黒毛和牛が友人の家々には飼われていた、土手で草を食べていた、田圃で土を掘り起こしていた、友人たちは気軽に牛の頭を撫ぜ親しげにしていた、紐を引っ張って移動させていたが、オレは近づくのも怖く遠くから眺めていた。田畑での物流は縦横に流れる小川に浮かんだ平べったい船に荷を積んで、竹竿を押しながら進んでいた。藁も、牛も、肥さえも運んでいた。今考えると肥を運んだ後、洗うのは大変な作業、後々しばらくは臭かったと推察する。もちろん肥溜めもあちこちに在って、藁で葺いた屋根の下で、ぷつぷつ泡を出しながら時間をかけて肥が作られていた。「舌で舐めて、おお、できた、ええ肥ができた、というんやぞ」と嘘か本当かの話していたのは誰だったか忘れた。電話も無い、水道も無い、ガスも無いという時代だった、それこそ映画「三丁目に夕日」の時代の10年前だ。ほとんどの人が歩き、自転車で走り、淀川には手漕ぎ舟の渡船が在った。

当時の淀川の土手は場所こそ変わってはいないが、一段と低く貧弱だったと思われる。台風で雨が降った、大雨が降ったその時に土手の上に上がった、土手のすぐ下まで満々と水がきていた、黄濁した水が雨の中を流れていた、淀川の河川敷で暮らしていた蛇がたくさん土手に上がって来た“蛇採りのおっさん”が棒で蝮を捕まえては背中の中に入れていた、背中の中は大きく“ひとだかえ”にも膨らんでいた。別のおっさんが蛇を捕まえて皮をひん剥いた、白い胴体がくしゃくしゃ動いていた。死んだ牛が流れているのを見た事もある。木造の鳥飼大橋のすぐ下まで水が在り、今にも流れそうだったがその時は流れなかった。その後いつの日かの台風で、木造の鳥飼大橋が潰れ流れ鉄の鳥飼大橋ができるまでの何年かは、渡船だった。

朝「降っている、本格的に・・・」と思いながら目覚めた、7:30 ぐらいだった、此処何日かは7:30か8:00に目覚める、先日までは6:00頃を目覚めだったが、少し涼しい、過ごしやすい、眠気も増すのか寝坊だ。この雨は時間も長く降り方も本格的に激しく降り続けている。今日の墓参りは中止にしようという事になった。長瀬に在る墓、毎年提灯を持って受付に行く、5000円ぐらいのお金を払って墓の左右に提灯をぶら下げてもらう、花を活け線香を燃やしてそれで終わりなのだが、盆が過ぎる頃にまた提灯を回収に行かなくてはいけない。この雨では提灯は付けてもらえない、線香の火は点かない、花は明日の風で散ってしまう可能性がある、とまあこのように先読みし中止になったわけである。水彩画の色を少し入れたが気持ちが乗らないので筆を投げ、外を見たり、本をめくったり、空疎な時間をだらだら過ごした。昼食を食べ終わった頃に雨が小降りになってきた。窓から見えるか見えない角の家が建前の真っ最中、昨日の続きで今日もガードマンが道に立っている、トラックが鉄骨やら壁材を積んで手前の道路に待機している、ざざ降りの中クレーン車がやって来た、こんな雨の中でも彼らは作業を中止しないんだと感心していた、今日は朝から暴風雨警報が出ている、建築屋とはそういうものなのか、しかし考えてみると、他の仕事でも暴風雨なんのその、危険な場所に行かなくてはいけない人が仕事がたくさんあるのだ。ガードマンと足場は見えるが、建物自体は窓から見えない、何処まで出来上がったのか、クレーンが吊り上げて下している様を見て楽しめなかった。2時頃になると外を歩く人達も傘を持っていない、道路も乾いてきた、せっかく晴れてきたのにクレーン車が帰って行く、ガードマン同士も挨拶をして帰って行った。「よし晴れた」スポーツ服に着替え、タオルと水を持って出た。工事現場の横を通ったらまだまだ半分ぐらいしか進んでいない、二階の壁も屋根もまだだ、もう一日か二日か、クレーン車が来そうだ。

「今日はこんなに降った、安威川の河川敷は恐らく水に浸かっている、昨日の話の続きで今日は淀川に行こう、久しぶりの淀川だ、と自転車を三箇牧の方に向かって走らせた、案の定、安威川にかかる橋の上から見ると黄色く濁った水がたっぷり流れていた、河川敷の上1メートルぐらいかな、山に降った雨がここまで直通で流れてくる。三箇牧小学校横の土手下に自転車を止め階段を上った。さすがにいい、淀川はいい、懐かしい、広々している、青々している、淀川の川幅は500Mと書いてあったがこれが本当にたった500Mしかないのだろうか、生駒の山並みが見える、枚方の街が、寝屋川の街が遠い向こうに見える、対岸の土手も霞んで見える。しばらくは土手の上を走った。この雨でもまだまだ淀川の水は多くない、普段より少しは多いかもしれないが「台風だ、大雨だ」と騒ぐ程には増水はしていない。しばらく行くと「くらわんか舟」の石碑が在った。高槻市が土手の上に土台を作りその上に大きな石「くらわんか舟の発祥の地はここ、柱本。しかしその後、枚方が地の利を得て向こうの方が有名だが・・・」という内容の残念石ならぬ石碑だ。「ええいそんなことはどうでもいい」と思いつつ進んだら“三島江の浜”とある。平安時代の船着き場の名残、芥川が合流している場所なのでとにかく広々している、気持ちがいい、簡易ゴルフ場や、公園、駐車場が無ければもっといい。すぐに淀川新橋に着いた、坂道を河川敷に下り、新橋の下をくぐってそのまま進んだ。仁和寺大橋まで行けるかな、しんどいかな、と思いつつ、いつものノロノロ速度、土手の中に車、人が意外と多い「こんな日でもゴルフか」と思いながら見ていると、どうも様子が違う、台風に備えて片づけをしている。何か所もある簡易トイレをトラックに繋いで土手の上に順次引き上げている。各エリヤを囲っている網を外し、たたみ、収納している。柱の棒もそれぞれ引き抜き、積み上げている。考えれば当然の事、増水してどんどん水の量が増えたらこころ辺りは水の流れの中、濁流が渦巻く、簡易の小屋も、トイレも、囲いも、跡形もなく大阪湾に持って行かれる、大阪湾はごみの海になってしまう。「いやあ、おっさんたち、ごろうさん、です」若そうなニイチャンたちも居たが、さすがに女性人夫はいなかった。ぽつりと降ったり、「おっと」と風が吹いたり、淀川の堤の中、舗装や簡易トイレも在るが、まだまだ自然、木に草に、遠くてほとんど見えないが水の流れ、大いに気持ちがいい。

ついでに知り得た情報：鳥飼に“鳥飼の牧”が在った。平安時代、京・大坂を結ぶ物流の大動脈が淀川だった。全国から牛馬を集め、飼育訓練をしていた。それらの牛馬は、京で活躍したそうだ。

登りに行こうと思いつながら時が流れた、台風が一度に2個も来て、お互いにぐずぐず動かず、週間天気予報は曇り、雨マークが続き、台風が北海道まで行ってしまっても、昨日は滋賀県に大雨が降ったと報道で。

8時前の電車に乗れば、高槻駅で敦賀行の新快速に接続し、湖西線北小松まで一本で行けると、慌てて自転車を走らせた。改札を通る時に電光掲示板に目を走らせると、思っていた電車が無い、高槻行普通と米原行快速が書いてあるだけ「おかしいなあ、消費税の影響で、変わったのか」とホームで時刻表を見直した。新快速は茨木駅を止まらないので表示板に書いてないのか、時刻表には敦賀行はない、米原行しか書いてないと首をひねりながら高槻駅に行くとホームのアナウンスが「次は米原行の新快速、後ろの4両が敦賀行新快速」という、キツネにつままれた感だけれども、とやかく細かい事はいいとして乗った。盆の最中なのか遠くへ行く客で満席、若者のグループが多い、家族連れが多い。最近はおレのようなオジンが多い、お洒落な帽子に遊び風の半ズボン、身体も元気そうな孤独なオジン、仲間ずれで喧しいぐらいのオジンとよく見かける。

9:00 北小松駅の改札を出てベンチへ。今日はトイレもなし、着替えもなし、靴の紐を締めるだけ、出発だ。10分ぐらいで登山口に着く。空を見上げると黒い雲で山は全く見えないが、麓のこの辺りは陽が輝いて明るく多少暑い。登山口の小川は水が溢れて、石を伝って道路に流れだしている。勢いよく流れ出る水を手で一掬い、「旨い」冷たくはないが「旨い」と独り言、湧水ではなく雨水だろう。今日はいつものコース、北小松駅→武奈→いん谷口→比良駅と歩く予定。年々体力低下のこの頃、去年と同じように歩きたい、寒風峠までまずは1時間で行けたらよし、もう少しかかるようなら武奈は諦め下山しなければ、などと考えているうちに寒風峠の標識が見えた、1時間でやって来たのでやれやれである。ペットボトルの水を飲む汗はだらだら流れ、それこそパンツの中まで“汗びしょ”である。

11:00 鞍部を少し上がった処、サンドイッチと水で一本「旨い」と感嘆を発すれど「体力がネエナア・・・」「去年はもっと元気だったのでは・・・」「去年はスキー場の上で飯を食ったけど・・・行けるかな」と嘆息。

00:05 釈迦ヶ岳到着。今年の1月2月と此処へは2度やって来た、1回は15分ぐらい下、もう1回は20分ぐらい下の処で引き返した。雪の中に大きな岩が見えた、“すぐそこ”がなかなか登れない、腰までの雪、足が潜り一歩踏み込むと二歩ずると下がってしまう「この雪では釈迦までかな・・・」と思っていたのが、それも怪しくなり、疲れ果てて弁当を食って引き返した。今日は雪が無いが暑い、高度があがって涼しい風も吹くが、8月の低い山、関西の山は真夏モード、ゼーゼー言いながら釈迦で5分休憩した。

1:20 昼食が終わった。何時もの手作り弁当、今日は腹が減るぞと御飯も多めに入れ、梅干しをほぐし混ぜ胡麻を振りかけた、おかずは野菜を炒め卵を入れた、ゴーヤ、豆、青菜を塩のみで炒めた。ご飯は山形の玄米ともち米を混ぜて炊いている、これが気に入っている、銀シャリより旨い。ふたを開けた時「入れすぎたかな、残すかもしれない」「飯を残すのは初めてだな」が、なんと完食、水を飲んでいざ武奈へ。岩の隙間の流れでペットボトルを満たした。

2:15 武奈に着いた、登った。上は半曇り、弱い陽の光、白い雲、黒い雲がまだ模様を織りなす。降る気配はない、昨日相当降ったらしく谷筋はまだまだ水浸し、先ほども土を踏んでしまって、スッテンコロリ、掌と膝をぶつけて、イテテである。武奈には2か月前にも来ているが、8月の木々の緑は青黒く盛んな緑色だ。

3:30 北比良峠。今日は武奈へは谷筋を通った、水が流れている処で水を汲みたかった、帰りはスキー場から帰った、これで帰れると安心して休憩時間を多めにとった、とはいえ、5分の処が10分になるぐらいか、少しだけゆっくりしただけ、小心だけれども、みみっちいけれど、ゆっくりし過ぎ暗くなると山道は怖いものだよ。北比良峠から1時間もあれば林道に出る、もう1時間もすれば駅に着くと計算できる。一日中曇っていた、下に琵琶湖が見えるが、色が無い、手前の田圃が淡い緑色、実り始めた稲の穂だ、家々はモノトーン、湖も島もモノトーン、対岸は見えない、霞んでしまって何も見えない。さあ帰ろう、下ろう、これから先は危険なし、慎重に下ろうと出発した。

4:40 川に到着。シャツを脱ぎタオルを水に浸して頭を、顔を、身体を拭いた、二度三度と拭いた、体の熱が引いていく、気持ちがいい、水を何度も飲んで風に吹かれてしばらく石の上に座っていた。「登った、歩いた」

林道を1時間かけて駅まで、茨木に着いて、ビールとアイスクリームを買った、シャワーを浴びてビールを飲んだ、リュックを開けると、中が湿っている、山の上は、よほど湿度が高かったようだ。

アメリカ在住の河合さんが「ホームページを全く更新していないようだけど、見ているよ、期待しているよ」といわれてからもう1年以上もって経ってしまった。既設のホームページは公開してもう20年ぐらいになるのかなど、文字通り指を出して指折り数えた。毎月のように次々更新をしてどんどん容量も増え10Mを超えていた。10Mを超えた時点で“YAHOO”のホームページサービスも借りて2本立てで更新しているが、だんだん飽き更新も怠りがちになり、“失われた10年”が過ぎてしまった。

今まで使っていた“OCN”社がHPのサービスをやめると知り、次の会社“FC2”を見つけ、編集に取りかかり、今日やっとある程度の部分をアップした。10年ぐらいは“ほったらかし状態”だったので、10年分の作業を取り戻し、もう一度初めから作り直すには、まだまだたっぷりかかりそうだけれど、時間をかけてゆっくりじっくり進めようと決心した、今度こそサボらずに。

その指折り数えた20年前頃、時々出席していた“六稜”という集まりの中で「未だにFAXなんて通信手段を使って・・・」「FAXは過去のもの、これからはパソコン通信だ」というような話が行き交っていた、まだITという言葉が流行る前だと思う。オレはその前から「CG（コンピューターグラフィック）のプロになるぞ」と当時で車一台分の大枚でMACのパソコンを買った。1年、2年と触っているうちに何とかパソコンが使えるようになったが、とてもプロには成れないというよりも、「絵は手描きがいい」「CGは手描きにはかなわない、少なくともオレは」と悟り、それ以後パソコンは手描きの絵、写真、文章の編集加工に使う、パソコンはオレの資料造りの道具と徹している。

当時、常時電話回線と繋いでおくという発想はオレには無かった、メールの送受信、何かのHPを見るという時のみ回線を繋いだ。メールもしていたが、周りにメールをやっている人がほとんどいないという状態なので、何日かに一度メールボックスを開ける、メールを出してから確認の電話を入れる、というように、郵便や電話の方をまだまだ幅を利かせていた。しかも電話回線の値段がべらぼうに高かった、回線はいったん東京を経由するとかで、東京に電話するのと同じ値段、3分間に300円とかいうぐらいの値段だったと記憶する。しかも回線速度が遅く、100Kぐらいの写真が、上の方からじわじわ見え始め、全部が見られるまでには時間がかかった、今は低額で一日中回線を繋ぎっぱなし、10M（100kの100倍）ぐらいの重さでもすぐの見える、たいていの作業をするのに回線と繋がっていないと不便で仕方がないという事で、もう10年20年するとどのようなことになっているやら想像もつかない。

当時“六稜”の仲間に谷君というデザイナーが居て、ITの専門家でもあった。彼主催の“IT講習会”を受講に行ったが“HTML”を使った講習会は難しすぎて付いて行けなかった。ただ絵を描くものとして“画集”は憧れで、自分の画集を作りたい、自分の手で画集を作って人に見せたいというのは夢だった。当時画集なんていうものは、功成り名を遂げた大家になってやっと持てるもの、売れなければ誰も作ってくれないものだったが、自分の画集が作れる、自分で作れる、夢が叶えられるという事でその方法を探した。“HTML”という言葉が出る度に、ドキリとしながらも“HTML”なしでホームページが作れるというソフトに行き当たった。

今年はこのような絵を描きました、今年はこちらに行きました、今年の展覧会は、今年の山は、と順次ホームページに載せて、「どんな絵を描いていますか」というような質問にも「ホームページを見てください」「ホームページのなかの00番の絵がいい、00番の山に行きたい」と何かと便利に会話も弾み、説明も簡単になり、長い文章を読むよりは、画像を一目見れば事足りるというようになってきた。説明が簡単で、短い説明で済ませ、画像を見れば納得できる、といことが本当にいいのだろうか、「おおお、わかった」と本当に理解できているのだろうか。モニターに現れる画像、印刷物に刷られた画像をつくづく見ると「違う」「これは実物じゃない」「実物はこんなものじゃない」と思うと同時に、その説明文、感想文も表面をあっさり撫で擦っただけ、内面や心象をないがしろにしているのじゃないかと思うようになってきた。パソコン、モニター画像、印刷物を否定するのではないけれど、あくまでも「これらは参考品」として見る、ホンマ物を見なければいけない、人が書いた文章も少々長くてもじっくりと読んで理解するようにしなければいけない、そんな風に世界と接していると、邪魔くさく時間はかかるが、面白い話がたくさん転がっている。そう、世の中は本当に面白い。

画像は、指折り数えた20年前頃の水彩画。

いつもの相棒、相・垣・前さん等と小氏、オレの5人で山行。いきなり天気の話ですが、今年の天候はおかしい、暑くない、雨が降りすぎると感じているのはオレだけかな。「今年は涼しく感じるんだけど」「そんな事はないよ、暑いよ、普通の夏だよ」と皆様という中に「そう、今年は涼しく感じる、涼しいというと、お歳で、感覚が鈍っておられるのでは・・・」と言われたという人が居た。「オレもそうなんですよ、涼しく感じるというと、暑さを感じなくなったら、熱中症になるよ、という御仁が廻りに居て・・・そう言われた」とお互い大笑い。よく雨が降る、降れば集中豪雨的ザザ降りになる、ギラギラの陽が少ない、梅雨が終わった当初はその暑さに身体が参ったが、その週が終わってからは「今年はなんだか涼しい」と言っている、オレがおかしいですかねえ。

7時に茨木を出発した。いつもの相様のトヨタ車“ヴィッツ”摂津北 IC、松原、南阪奈、葛城 IC から国道に入って、御所、近鉄下市口駅で小氏と合流、黒滝、洞川、御手洗溪谷、行者還トンネルと進んだ。道は狭いが御手洗溪谷はいつ来ても美しい、運転しながら見るわけにはいかない、景色を楽しんでいる場合じゃないぞと思いながら、川の水、廻りの木々の緑、陽の光が目端々に入ってくる、山の風が旨い空気を運んでくる、岩がゴツゴツ剥き出しの壁、ガードレール、狭い道、釣り人に目をやりながらどんどん進んだ。この道は何度も来た、ほとんどの場合、澤山さんの車に乗せてもらってやって来た、大淀から国道169号線方面にも何度も行った、行者還トンネルも何度か来た、十津川村方面に行った。大嶺奥駈道の幾つかの山々を登った、山上が岳、弥仙、釈迦ヶ岳、前鬼は何度か登った。冬にも来た、雪の中を歩いた。40歳台はほとんど信州に行っていたが、50歳代になって近畿の山が多くなった、近畿はこの大嶺、大台、滋賀県の湖東に湖西がほとんどだ。3か月前のGWには大嶺奥駈道を衣川さんと歩いた、吉野から熊野本宮まで7日間かけて歩いた、寝袋、食糧、水を担いで歩いた、よくも歩けたものだと思っただけで、この歳になって走破できるとは、しんどい山行だった。

トンネルの手前は整備され有料駐車場1000円と書いてある。聞くとこれは去年からだそうだ、それまでは道路の脇に車を止めて登っていた。登山靴に履き替え、軽いリュックを担ぎ、すぐ傍の登山口に向かった。出会いまで50分、太師像まで50分、弥仙まで50分とコースタイムに出ている「楽しみましょう、ゆっくり行きましょう」いいながら出会いまで大汗をかいて登った。「2時間で帰ってきますので、コーヒーを」と3人だけで進んだ。1時間進んだ頃、雷がゴロゴロ、雨がポツポツ次にザザ降りになり「帰りましょう」本降りの中を歩いた、出会いに戻った頃にはやんでいた。この相棒の山行はおやつが潤沢、アンパン、飴、おかき、まんじゅう、酢昆布、柿の葉寿司、水ようかん、パクパク、モグモグいただいた。小氏が「絵の代金」と3万円をゲット、多すぎると思いながらもいただいた。7時に茨木に帰り着いて、お神酒をいただいた、甘露。

3日前にも高野山に行った、家族で行った、娘二人、その子一人の5人で行った、子供の体調が悪く“あげくだし”状態で早々に引き揚げた。茨木からは高野山も洞川も遠い、時間がかかる、高速事情が悪く車で行く場合、地道を走る時間が長いからだ。もうすぐ高野山に到着という登り道、前からも後ろからも車が来る、崖崩れの工事現場があちこちに在る、そんな登り道、左は山を削った切り立った壁に網が張ってある、左はガードレールの向こうは崖、そんな処で左の網の下に人が倒れて手が揺れている、仰向けに寝て手を左右に振っている「酔っ払い?」「仕事をしている様子ではないねえ、おかしいねえ・・・」と少し先のカーブ、広くなった処に駐車した、「あれはおかしい、見てくる」娘も付いて来た「あれれ、大丈夫、立てる」「・・・」抱き起し立たせオレは脇に腕を入れ、娘は反対側の腕に頭を入れている、ひっくり返って、溝に挟まって、頭を打って、起き上がれず、網を掴んでもがいていたようだ。車がどんどん来るので誰も止めて助けられなかったようだ。ゆっくり歩いて車まで連れ乗せた。15分ぐらい涼しい車の中で落ち着いたのか、駐車場からすたすた歩いて行かれたようだ。86歳のおじさん、健脚で30キロほど離れた麓の町から、高野山に遊びに来たらしい、去年奥さんが亡くなった、特攻隊にも志願した、若い頃はよく歩いた、あんなところでひっくり返るとはと話していた。見た時は、えらい事だ、立てないかも、帽子に血が付いている、立った当座はぼおっとしていた、1,2分間に挟んで歩き出したら、ぽつりと言葉が出てきた、病院か、交番かと思っていたが、元気になって、すたすた歩いて行かれた、と娘の弁。人助けができた、嬉しい限りだ。帰りは車の座席をベッドにして子供がすやすや、これがよかったのか帰ってからは元気を取り戻し、走り回っていた。図版は6年前のアトリエ。

加藤秀俊著<メディアの発生>を読みながら、メディアとは新聞・TVの事か？本のサブタイトルに「聖と俗を結ぶもの」とある。読み始めたら面白い本に当たった。興味を持っているシャーマニズム、呪術の事が書いてある。

先生：広い意味で彼岸と此岸（しがん）を結ぶ、霊界と現生を繋ぐ能力を持った特別の人々。“霊媒”の事を medium メディウムともいう。◎ミクロネシアを調査中、島民たちの畏怖と尊敬を一身に集める魔術師（英語で magician）に会った。小さい小屋に座る六十歳を超えた白髪の男、この人は何でもできた。病人や怪我人を呪術や薬草で治した。農作物の豊穡を願い、人も懲らしめられた。◎ニュージーランドのマリオ族が持って居るマエラという集会所、此処は部族の心の館、誰でもここに来れば祖先と対話ができる、祖霊が現世に戻ってくる。マリオ族にとっての精神の終結場所、彼らにとって死の世界はそんなに遠い処ではなく、生死のあいだは何時でも往復可能なのだ。◎太平洋に出漁中のカツヲ漁船の船長が不漁を嘆いて、故郷の沖縄に居る“ノロ”（沖縄の巫女さん）に国際電話をかける。「船長室に在る神棚に、全員で祈れ」と宣託。船長はレーザーや望遠鏡を使って魚群を探し回った、漁の成功失敗は、それが生業なので「運」としかいいようのない要素が働く。そんな時神様に伺ってみるという事はごく謙虚で人間的な方法ではないのか。はるばる国際電話をかける漁民の姿を見て感銘を受けた。◎東北の“イタコ”彼女たちも祖霊を現世に呼び戻す特別の能力を持っている。

こうした一連の習俗を“俗信”“シャーマニズム”で片づけることは簡単だ、合理主義、科学主義の立場から見れば霊会の存在など説明ができないし信じるに足りない、それでも信じる人がたくさんいる、特殊な霊能者があちこちに居て、祈祷、呪術を行っている。そういうオレもこの手の話、この類の話は一顧だにしなかったが、今は、この話、この事は人が生きていくうえで大事は事、要素だと思うようになった。

先生：私の分類によれば、およそ世界には“宗教文化圏”と“信仰文化圏”があり、人類の多くは後者に属している。後者の我々は自らを取り巻く環境のあれこれを「カミ」として信仰する、これを「宗教」という窮屈な、面倒くさいものには仕立てあげなかった。ついでながら私がいつも感心するのは、日本国憲法第二十条、英文で freedom of Religion となっている部分を日本語で「信教の自由」としている。宗教の自由ではなく信仰の自由なのだ。教義戒律などの厳格な統制を受けている宗教ではなく「カミを信じる信仰」を含めて「信教の自由」としている。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教の三つの宗教がある、多くの信徒を集めている、この一神教に対して「アニミズム」「凡信論」が原始的で野蛮だというのはおかしい。人間が、何かの宗教を信じるはずだ、というもおかしい。

オレはふと考えた、歌の世界、踊りの世界、エクスタシーにトランス状態になっている人、少しづつ時間をかけてそういう状態に入ってゆき、観客も舞台も忘れ天や霊と交信しているように見える、そんな彼らを見ながら「あの状態はいい、うらやましい、舞台は見るもんじゃない、立つものだ」といつも思った。アートというものは冷静な感性で演じるもの、自分自身が激情に流され、その中で喜怒哀楽を著わすのではなく、気持ちや情を上手くコントロールし抑制し喜怒哀楽を著わすのがアートだ、なんて意見もあると思う。そんなもの、オレは歌も踊りも出来ないからわからないが、できるものなら歌ってみたい、踊ってみたい。

絵を描いている時、“憑き物が落ちる”という表現がぴったり来るようなことがある、描いていて、この一筆が上手くいきますようにと念じながら入れる一筆がいつもながら上手くいかない、とそんなこと徒労なことを続けているある時に、「お、やったな」と思える時がある。以前からそこにはそのピースしか当て嵌まらない、そのピースだけと思われるそれをピタリとそこに当て嵌める。そういう時は感激するねえ、嬉しいねえ。駄作・在庫作品を造り続ける日常の中で、脳が天に昇る、気持ちがふわりと浮く、これはいい。ただ残念ながらオレが交信しているのは、天の声でも霊の声でもなく、風がふわりと教えてくれているのかもしれない。こういう事が日常に度々訪れてくれるなら、有難い限りだが、実情はほんのたまたま、一年に一度在るか無いかの天にも昇る、昇華の一時かもしれない。ただこれはエクスタシーですね、トランス状態ですねえ。

「わたし、だんなとねるとき、いつもこうよ」と言うおねえさん、それはどうも羨ましいですねえ、と蛇足。

「やっぱすきやねん、きつくだいてよ、こんやは」聴きながら。